

恵みと真理のニュース



2019 年 12 月の三次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



[証]

再び死亡がなく痛みがない天国を希望しながら生きるようにしてください。父なる神様の恵みに感謝をささげます

私は6人の兄弟の中で二番目の娘で生まれました。幼い時、母が熱心に偶像崇拝をして占いをしに良く行きました。父の事業の繁栄と家庭の平安のためしきりに占いたり、祭祀をしたり熱誠的に偶像崇拝をしました。それにもかかわらず、父は事業に失敗して人生を嘆いて亡くなりました。私が16歳の時でした。

私は22歳に母方の叔父から紹介を受けた人と結婚して6人兄弟の家庭の一番上の嫁になりました。姑も熱心にお寺に通い偶像を仕えていました。姑について私もお寺に通い一番上の嫁の役割をするため力を尽くしましたが、姑は私が金がない家から嫁に来たと嫁いびりがひどくなりました。そうするうちに願っていた息子を生まれました。

しかし、孫の面倒を見る喜びもしばらく、姑が中風で倒れました。そして、何年がたって舅さえ急に倒れて亡くなりました。舅が亡くなって家計が大変になり、私も会社に通わなきゃいけなかったです。私は職場に通いながら病気に患っている姑の介護をして、家庭の大小事もしました。姑は17年間を中風で苦勞して結局、亡くなりました。私は近くに住んでいる母を頼りながら大変な日々を耐え忍びました。

ところが、私がそんなに頼っていた母も重い病気に患いました。風邪だと思って病院に行ったら肺がんの末期の診断を受けました。母はお寺に行かなく教会に行きました。病気で体が弱くなった後、教会で水洗礼を受けて短い期間でしたが、苦痛もなく平安な姿で天国に召されました。その時、母のため牧師がよく訪問し

てくださって、生徒たちも切に祈ってくださったことに大きく感動を受けて私も教会に行くことにしました。お寺に通っていた私が教会に行こうと言うと旦那は反対もなくて許可してくれました。どこの教会に通うかすぐ決められなくて、教会に行くのを後回しにしているうちに今は勸士になった区域長から伝道され2006年から私の夫婦は孫と共に恵みと真理教会で神様を信じる信仰生活を始めました。はじめは礼拝に参席して当会長の牧師の説教を聞く時に私の心が平安になりました。お寺に通うときには一度も感じられなかった平安でした。牧師の説教のみ言葉を聞いて恵みを受けながら神様に対する信仰が育ちました。教会に通ってから一か月になったとき救いを受けた喜びと感謝の心をもって種に十分の一献金を始めました。当時警備員で働いた旦那も同じ心でした。教区長も私の信仰を励まししながら私を祝福してくださいました。

ある日の夜明け、早く仕事に行った旦那が大きい交通事故にあったと連絡が来ました。旦那は数回も手術を受けたので手術の部位に炎症がたくさんできて大変苦勞しました。ちょうどその時に当会長の牧師がヨンイン聖殿に来られ盛會を導きました。その日、旦那は病院から出て盛會に参席して私と共に牧師に按手祈りを受けました。その後、旦那の奇跡のように病気がよくなりました。病院に入院して2年9か月ぶりに退院をして以前に通っていたアパートで再び働きました。また、勤務中に高層から落ちた物にあたる事故にあって今回も長く病院生活をしましたが、神様の恵みで健康を取り戻しました。しかし、今回は私が健康検診で胃癌初期の診断を受けました。幸いに早く発見して内視鏡の手術で瘤を除去しました。その後20日後に両膝に人工関節手術を受けて、手術がよくできなかったから再手術を受けました。これから楽に生活できるかなと思いきや、旦那が以前痛んだところがまた悪化され結局家族が見る中で天国に召されました。すると私は様々な否定的な考えをするようになって信仰が弱くなりました。その時、当会長の牧師の説教を聞きながら慰め

られ、否定的な考えを捨てることができました。ヨブが重なる苦難を通してきれいな銀のような信仰をもったのを考えて種だけをゆだねてもっと信仰生活に頑張りました。

健康がよくなかった私は腰の狭窄症など様々な手術を受けたことがありましたが、その時ことに助けてくださる神様をゆだねて大変な手術の治療の過程をよく勝つことができました。最近は股関節の手術を受けたとき、私は“恐れるな、私があなと共にいる。／たじろぐな、私があなと共の神である。／私はあなを奮い立たせ、助け／私の勝利の右手で支える。”

(イザヤ書41:10)というみ言葉を暗記しながら手術室に入りました。そして、驚く神様の恵みを体験しました。同じ手術を受けた人々の話を聞いてみたら、手術の直後に耐えられないほど痛みがひどくて他の人に手術を進めないようになるそうです。ところが、私はそんなに痛みがなかったし再活もよくできてすぐ退院して家で生活をするようになりました。私はどんな苦難に会っても熱心に祈りながら忍耐して約束のみ言葉を信じ賛美する中で神様がともにおられる恵みをいつも体験しながら生きています。

“目から涙をことごとく拭い去ってください。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。(ヨハネの黙示録21:4)ハレルヤ!

私にイエス様を救い主で信じ仕えるこの尊い信仰をくださった永遠な命と天国の希望の中で生きるようにしてください。神様を賛美します。人生の山場ことに心霊な慰めを与えてくださり、担える力を下さり、知恵を下さる神様に感謝捧げます。今までわたしのため祈ってくださったヨンイン聖殿の牧師と勸士と主の働き人々、すべて感謝します。これから恵みと真理教会をもっと愛し、相変わらず信仰と愛で熱心に信仰生活をします。



[信仰コラム]

ペテロの拒絶に対する主のしがめとたしなめ

“...きょう、み声を聞いたなら、／神にそむいた時のように、／あなたがたの心を、かたくなにはいけない”(ヘブライ書3:15)

イエス様の弟子の中でペテロは独特な部分がありました。彼はイエス様の予告なさる御言葉や行われることあるいは、指示や要求に対して自分の意見と意志を確実に表わしました。異なる意見を提起したりまた、拒絶や遠慮する思いを躊躇わなく表明しました。しかし、私達が一つ記憶すべきことがあります。ペテロのそのような態度がイエス様に対する不信や逆らう精神から出たのではないという事実です。イエス様が行われる事や要求に対してペテロが婉曲に拒絶の意思を表明した事件を調べてみましょう。

第一は、ヨハネによる福音書 13 章に記録された事件です。

過超の一日前の夜、イエス様が 12 人の弟子達と共にエルサレムのある家の屋根裏に集まって夕食をする時にたらいに水を入れて弟子達の足を洗い、タオルで拭うことを始められました。自分の順番になると拒絶するペテロとたしなめられるイエス様が互いに交した話が記録されています。一番目の対話でペテロが“主よ、あなたがわたしの足をお洗になるのですか”と遠慮の思いを表わしました。イエス様が“わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう”と言われました。イエス様が言われた通りに聖霊様の助けと教えがあった後にペテロが悟

りました。二番目の対話でペテロが“わたしの足を洗って洗わないで下さい”とすると、イエス様が“もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる”と答えられました。ここで洗いは“罪の洗い”を象徴的に表現したのです。

三番目の対話ではペテロが態度を 180 度に変えて“主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も 頭も”としたのでイエス様が“すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなからだ。あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない”と言われました。ここに悔い改めに関するとても重要な真理が啓示されました。体を洗ったということはイエスキリストを信じて救いを受けて生まれ変わった人になり神様の子になる悔い改めを意味します。足を洗うのは既に救いを受けた者が神様の思い通りに行えずに神様の光栄を遮ったことに対する悔い改めです。悔い改めはこのように二種類です。

第二は、使徒言行録 10 章に記録された事件です。ペテロ使徒が異邦人百卒長コルネリオの招請を受けてカイザリヤを訪問した事件です。ペテロがお祈りする中に天が開きながら四すみが吊された布のような入れ物が下がったが、その中に律法に食べはならないと規定されている種類の動物が含まれている奇異な光景をみました。その時“ペテロよ。立って、それらをほふって食べなさい”という御声が聞こえました。ペテロは“主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません”と拒絶しました。すると二回目の御声が聞こ

えました。“神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない”としました。このようなことが 3 回あった後に、入れ物が天に上げられました。ペテロはこの奇異な幻が何を意味するかが分りませんでした。その時、コルネリオが送った人々がペテロにきました。ペテロは聖霊様の指示でその人々と共にカイザリヤに言ってコルネリオの家に入ると、コルネリオが一家と近い友達まで集めて待っていました。ペテロが福音を述べ伝える時にコルネリオの家に集まった異邦人達が自分達のように聖霊を受けるを見て神様が彼らを救われてくださったことを知り、彼らにもバプテスマを受けさせました。ペテロはユダヤ人と異邦人に福音伝道の初の門を開く役割をしました。

ペテロが“主よ”と呼びながらもイエス様の要求通りに行うのを拒絶したのは矛盾で二律背反的です。非聖書的な偏見、誤解、先入観念、固定観念のためでした。共産主義の思想を受け入れながら、宗教多元主義を受け入れながら、不義で欺瞞する人々を擁護しながらキリスト人だと自負する人々がいます。このような人々は心が頑なな故になかなか聖書に記録された訓戒を受け入れません。ペテロは誤解と偏見を持ってはいたが、心が頑なではなかったのでイエス様のしがめとたしなめを聞く瞬間に直しました。自分の考えと観念と主張が聖書の御言葉に外れたことが発見されると直ちにこれを捨てる勇断を下す人は主の愛と認定を受けます。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」

悔い改めの秘密



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

まず、悔い改めという言葉と秘密という言葉の意味を説明します。悔い改めは救いの必須要件であり、悔い改めと救いは不可分の関係です。救いを得るためには、罪の赦しを受けて、罪の赦しを受けるためには悔い改めなければなりません。二種類の後悔があります。

まずは、イエス・キリストの以外に救世主がないことを知って、イエス・キリストを受け入れることが悔い改めです。「生命に至る悔い改め」と称しました。このような悔い改めをした人が真のクリスチャンです。

次は、クリスチャンらしくない行動を悔いて立ち返ることが悔い改めです。「生命に至る悔い改め」をしない人は自分の行動に対して後悔するのは、信仰的な意味での悔い改めではありません。これは、自分と人に向かって悔いで反省です。聖書の中で秘密という言葉は、神が教えていただかないと知ることができないことを指します。悔い改めという言葉も、聖書を通し、その深い意味を知ることができます。聖書を通して知ることができる悔い改めに関する秘密を見てみましょう。

第一には、悔い改める機会が常にあるものではないという事実について説明します。

1. ノアの時代に洪水で滅ぼされた人々は悔い改める機会を逃した人の典型的なです。

人類の歴史の中で特記するほどの事件の一つとして数えられる事件は、ノアの時代にあった大洪水事件です。創世記 6 章に記録された。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め」（創世記 6: 5, 6）。

世の中に罪が蔓延しました。神は 120 年間の猶予期間を与えました。そして義人ノアに箱舟を予備するように命令されました。神の言葉を徹底的に信じ従うノアは箱舟を造る一方焦る気持ちで人に洪水審判を警告しましたが、馬耳東風でした。神は長く寛容するが、いつまでも寛容なさるではないです。箱舟が完成し、神の命令どおり、ノアの家族は皆箱舟に入りました。神は七日の猶予期間をくださいましたが、人々は箱舟に入らなかった。ついに神が箱舟のドアを閉めました。救いを得る機会の日々はみんな過ぎてしまいました。空からものすごく雨がふれて地面に水が信じられないほど湧い上がりました。だから人が箱舟に走ってきました。泣き

叫んで彼らのあやまちを叫んでいた、神のあわれみを求めたが、応答ありませんでした。イエスの再臨の時にも、ノアの時と同じだと、イエスご自身が言われました。大洪水が押し寄せるとい意味ではありません。人々は肉体的満足のためだけに生きて救いの福音には耳をふさいで生きてクリスチャンが携挙された後に号泣し悔い改めの機会の門は固く閉じられてしまいでひどい状況になされることの意味です。

悔い改めることは常に有効なものではありません。ドアが閉じられた後は、悔い改めが無用で遅れます

2. 劇的な悔い改めに死ぬ一歩手前に救われた人がいます。

イエスが付けられた、十字架の左右に十字架が建てられました。凶悪な強盗二人が付けていました。それらの一人である強盗は、イエスの態度をいくつかの単語の言葉を聞いて、大きな衝撃を受けました。イエスは罪がないことを悟りました。この方は、天国の主人であるメシアが間違いないと思いました。彼はイエスに懇願するのを「主よ、主の国に入って行く時に、私を覚えてください。」としました

イエスは彼に言われ、「私は本当にあなたに言ったら、あなたが今日私と一緒にパラダイスにいるのである」しました。この強盗は劇的な悔い改めに劇的な応答を受けました。しかし、かつて悔い改めてキリストの中に入ってきた人が、それより恵まれた人です。すべてのクリスチャンは、まだ後悔しない人々が再び悔い改めの機会を得ることができない人がないように切迫した心情で熱情的に伝導しなければなりません。

第二に、悔い改める人に対して、神が施す赦しの範囲について説明します。

1. 神の約束を過ぎに不信し、命令を過ぎに逆らって、神を激怒させた場合にもかかわらず、悔い改めても、神様が与えようと意図していた福を、喪失することになることもあります。

エジプトから解放されたイスラエルの民の多くが問題に直面するたびに、神が立てられた指導者を妬みして、神に恨み不平しました。神は彼らの恩知らず耐えて、権能を示しまして、それらを世話しました。しかし、神は無限に許しませんでした。イスラエルの子らが 2 年ぶりに彼らの目的地であるカナンに隣接したカデシユ・バルネアに到着したとき、モーセは 12 人の斥候をカナンに送りました。40 日間、その土地を検出して帰ってきた斥候たちの中に 10 人は非常に否定的な報告をしました。ヨシユアとカレブは非常に肯定的な報告をしました。民が 10 人の言葉だけ聞いて号泣し叫びました。「またイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、全会衆は彼らに言った、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」（民数記 14: 2, 3）

神はモーセに言われました。「この民はいつまでわたしを悔めるのか。わたしがもろもろのしるしを彼らのうちに行ったのに、彼らはいつまでわたしを信じないのか。わたしは疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし、あなたを彼らよりも大いなる強い國民としよう」（民数記 14: 11, 12）。モーセが神に申し上げました。「どうぞ、あなたの大いなるいつくしみによって、エジプトからこのかた、今にいたるまで、この民をゆるさされたように、この民の罪をおゆるしてください」（民数記 14: 19）

神が「私があなたの言うとおりに赦す。」として、次のように理由を付けて言われました。

「わたしの榮光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きしたがわなかった人々はひとりも、わたしがかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見ないであろう。またわたしを悔った人々も、それを見ないであろう」（民数記 14: 22, 23）

モーセが神が言われた言葉を民に聞かせてくれたので、民が大きく悲しいしました。そして、「朝早く起きて山の頂きに登って言った、「わたしたちはここにいる。さあ、主が約束された所へ上って行こう。わたしたちは罪を犯したのだから」（民数記 14: 40）と悔い改めました。モーセがこれにしないようにしたが、彼らは上がって行ったところ、その産地に住んでいたアマレクびとカナン人が下りてきて、それらを打ちました。神はイスラエルの民の悔い改めの言葉を聞き、許して、それら消滅しないようにしたが、彼らはカナンに入ることをキャンセルされました。神の約束と命令を過度に不信し逆らって神を激怒させた場合にもかかわらず、悔い改めても、神様が与えようと意図していた福は、喪失することになることができます。

2. エサウの場合を説明します。

エサウとヤコブは双子で生まれました。エサウが最初に生まれたので兄になりました。ヘブル人への手紙にみると、「また、一杯の食のために長子の権利を賣ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい。あなたがたの知っているように、彼はその後、祝福を受け継ごうと願ったけれども、捨てられてしまい、涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである」（ヘブル人への手紙 12: 16, 17）と記録されました。

エサウは亡霊ように行ったのは、長子権を売ったことです。エサウが長男として生まれたので神がアブラハムに与えられた祝福を継承していくことができる位置にありました。ところが、エサウは、その福を軽んじる考えの一つに自分の長子の権利を弟ヤコブに渡してしまいました。エサウは、アブラハムの家系から長子の権利を持つ霊的な価値があるのを一歩遅れて悟り、後悔して涙を流し、これを回復しようとしたが、できなくなりました。

悔い改めるとすべてのことを原点に戻すのができません。活動力と能力があるときは、主の仕事を忌避しているが健康を失った後、または財物がなくなったときに後悔しても無駄です。能力と機会があるとき、主の事に努めます。霊的なことの価値を無視して行った後に、その事実を一歩遅れて悟り、悔い改めが喪失した特権は回復することができなくなりました。

生命に至る悔い改め、罪の赦し受け、永遠の命を得て天国を企業に受けられる悔い改めなく死に至った人は、再び悔い改める機会を得られません。クリスチャンでありながら、クリスチャンらしくない行動で神の榮光をひどくかざす自分に許された祝福を大きく失うことになることができます。このような事実を念頭に置いて、聖徒の皆さんは、多くの人を命に至る悔い改めをするように積極的に伝導してください。そして、あなたが得ることができる報いと福を喪失しないように、クリスチャンとしてふさわしい生活をしてください。